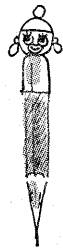


夏休みに望むこと



別役 富美子

今までの保育を通して感じることは、教師と子どもの生活の場で、共に楽しめ、生き生きとして、互いに人間として生かされてくるような保育が、なされなくてはいけないと思う。しかしこのような保育は、非常にむずかしいことでもある。

子どもは、人との出会いでも、物との出会いでも、本物に出会った時、その瞳は輝き、動きは活発となり、喜びはひとしお大きなものとなって表われる。たとえば日々の保育の中でのままごと遊び。この遊びに、実際の物が切れたりするナイフや、菜っ葉を加えてやるだけで、ご馳走のレパートリーは広がり、動きは活発となり、今までしていたままごと遊びに、広さや深味が増してくる。

休みのなかでも特に長い夏休み、その大半を共に過ごす母親と子どもの生活の場で、楽しめ、生き生きとし、互いに人間として生かされてくるような、そんな過ごし方があってもいいと思うし、必要ではないだろうか、たとえば、子どもたち

の大好きなおやつ、このおやつ作りを母と子で仕事を分担しあい、話し合って行うことも、ひとつの過ごし方ではないだろうか。普段はいじらせてもらえない台所用品を使える喜び、バターを練っているとクリーム状になってくる時の驚きや、小麦粉、砂糖をふるいにかけて、ふるっている時のうれしそうな顔、タネを伸ばしての型ぬき、teriだしのための玉子ぬり、ゼリーやチェリーを使つての飾りつけ、好きな型をつくり、それが焼きあがるまでの期待、焼きあがった時の喜びの顔など、普段の生活ではみられない別の面の子どものようすがみえて、母親自身も、仕事の手順や道具の扱い方を教えながら、共に楽しめるのではないだろうか。

しかし、あくまでも子どもも主体のおやつ作りであってほしい。ともすれば大人自身が夢中になりすぎてしまい、つい子どもに対して、制止のことはや、動作をとりがちとなる。二人で楽しみながら、作りあってこそ、いいものがたくさん表われてくるのではないかと思う。

ひとつの経験例としておやつ作りをあげてみたが、山や海へ出かけることも、また子どもたちにとっては、楽しいことのひとつでもある。しかし、ただ単にどこかへ連れて行けば、それで親の役目はすむ、そんな安易な考え方ではなく、子どもの心の中にいつまでも、楽しい思い出となってくるような、過ごしかたをみつめてほしい。それがやがて、大きくなったときに、心の中にいつまでも郷愁となって残ってくるようなもの。今自分が生きている、その生きている力となって、ささえてくれるものは、ことばで表現できない何かである。この何かとは、私にとっては幼ない時の思い出、母や兄たちと連れだって、夕焼にそまった田んぼ道を散歩したり、ホタルを追いかけてまわしたりしたことなど、まだまだなつかしい思い出が、文字では書きつくせないほどある。このことばでは書きつくせないなつかしいものをたくさん持っている人は、幸せな人だと思おうし、子どもたちにもたくさん持つてほしいと思います。九月になると、子どもたちはまた元気に登園して来ます。グンと成長を感じさせる子ども、誰ちゃんは何て生き生きとしているのかしら、あんなに友だちと遊べなかった子どもが、友だちを見つけ、外に飛びだしている等、保育者は驚かされることなくたくさんあります。そんな

驚きもわれわれ保育者の、夏休みの過ごし方で、とらえ方もずい分違ってくるように思います。

夏休みは、保育者自身も、生き生きとした生活の場をみだしてゆく必要があると思います。ある人は旅行、ある人は読書、またある人は、全然違う環境の人たちの交わりの中に参加して、生き生きとした場をみだして行く。その人その人で、みいだし方は違っていても、この生き生きとした、新鮮さこそ、幼い子どもたちを育てていくわれわれには一番大切なものではないだろうか。新鮮さとは、心のことである。心が新鮮で生き生きとしていれば、肉体は少々疲れていても、よく子どもたちのようすが見えたり、何げない子どもが発した、言葉ひとつひとつをも大切に育てていく力となってくる。われわれ保育者も、前向きな姿勢で、この夏休み、大いに遊び、何かひとつでも、自分の心の中が、ほのぼのとするような経験をもち、また二学期には子どもたちと保育者が、共に得てきたものをぶつけ合い、毎月が楽しく、生き生きとし、互いに人間として生かされてくる保育がなされるよう、そのためにも、十分英気を養うことができるような、夏休みでありたいと思っています。

(もと、啓明幼稚園)